

論文番号	13 (第10回研究会 2012.11.24 於青山学院大学)
タイトル	翻訳作業の参与的内部観測のために——日本語でのシャドウイングという方法論
著者名(所属)	高橋さきの (翻訳者、お茶の水女子大学非常勤講師)
連絡先 Eメール	sakinotk@nifty.com
<p><b>論文内容</b></p> <p>(背景および研究目的)</p> <p>シャドウイング(聴きとりながら、同時進行的に音としてアウトプットする作業)は、非母語のスキル向上のために通訳養成の現場で従来から使用されてきた方法で、近年は英語学習の現場でも採り入れられるようになってきている。類似の作業としては、ディクテーション(聴きとりながら、文字としてアウトプットする(書き取る))や、要約(聴きとりながら、内容を要約して音または文字としてアウトプットする)があり、非母語/非第一言語の運用スキルの涵養という場面では、そのいずれもが採り入れられているが、シャドウイングの場合、聴く作業と話す作業を同時に行わなくてはならず、双方の作業の独立性が求められる度合いが高いことに特徴がある。</p> <p>翻訳作業は、書記言語間を往来する作業であるため、《音》にかかわる側面は軽視されがちであった。しかし、原文の読み取りに際しては、内容に応じて各種の音読や黙読が採用されるし、言語間を往来するにあたっては、多くの場合、頭の中で自分または他者の声を聴きながら、つまり音声言語を媒介するのと平行なかたちで作業が進行する。訳文の推敲に際しても、各種の音読や黙読が適宜実施されるわけで、翻訳作業従事者は、翻訳作業の間じゅう、文字と音とを超速で行き来しているともいえる。このように、翻訳作業において《音》の占める割合はきわめて高く、耳で聴いた内容を、同時進行的にさまざまなかたちでアウトプットする作業は、翻訳作業の随所で並行して行われている。《音》に注目することで、翻訳のさまざまな側面をめぐることがらに気づける可能性は高く、この点こそ、《音》に注目しつつ整理していくことが有効なゆえんである。</p> <p>こうした整理は、行き来する双方の言語で行っておくことが好ましいが、まずは第一言語の側で行っておくことが望ましい。従来あまり行われてこなかった第一言語でのシャドウイングは、こうした整理のための方法論となりうるはずである。</p> <p>なお、日本語を第一言語とする翻訳作業従事者の多くは、日本語に関しては、中学校で学習した「学校文法」のみで対処しており、この場合、行き来する複数言語間に共通するさまざまな事象の整理に障害をきたすことになる。「学校文法」経由ではないかたちで、さまざまなことがらに気づくことのできる回路も必要で、この意味でのシャドウイングの活用についても検討した。</p> <p>(検討方法等)</p> <p>実際に各種のシャドウイングを行いながら、自己観察を行うという参与的内部観測を採用した。その結果をふまえ、さまざまな年齢・経験年数の被験者に、NHKの『10min.ボックス』(「理科2分野第11回 天気の変化」)、「現代文第2回(トロッコ(芥川龍之介))」を見ながらのシャドウイングや、ワークシートでの作業を行ってもらった。</p> <p>(結果および考察)</p> <p>シャドウイングの方法として、以下の4種を実施した。</p> <p>(1) シンプルなシャドウイング。リスニングに問題のない第一言語で、しかも双方それぞれの言語の運用能力にたけた者であっても、シャドウイングができないケースがある。聴き取りのために使う回路と、話すために使う回路とが独立していないためと思われる。</p> <p>(2) 文字列を思い浮かべながらのシャドウイング。表記(漢字・かなの別、句読点、改行など)も同時に思い浮かべる。ディクテーションを《口》で行う作業、あるいは音楽を聴きながら五線譜の音符を思い浮かべるのと平行な作業とも考えられる。普段、文字列を見ながら音に変換するのは逆で、音を聴いて文字列を思い浮かべる作業であり、まだ聴こえてきていない先までの予測が必須であるため、(1)より難易度が高いが、訓練によって確実に延びる。</p> <p>(3) シャドウイングした内容を聴いた際に思い浮かべるであろう情景を想像しながらのシャドウイング。(2)の要件に加えて、思いつく情景を分析する回路が独立していることも必須であるため、難易度は増す。あらかじめ、鈴木(2005)やワークシートで文法事項と思い浮かぶ情景との間に交通をつけておくことが有効であった。</p> <p>(4) 抑揚をつけてのシャドウイング。声だけでなく、思いつき身振り手振りもつけて行う。要約</p>	

を《口》で行う作業、あるいは音楽を聴きながら五線譜を各種記号も含めて思い浮かべるとパラレルな作業とも考えられる。この作業では、先読みに加えて、内容の重みづけの判断も必要になる。分節同士、文同士のつながりをわかりやすく示せなくてはならず、ある程度の文法事項を音の水準で体得できる可能性を感じた。(3)の情景を想像しながらのシャドウイングと組みあわせることで、文法事項もふまえた内容解釈はかなり容易になるようであった。

こうした各種のシャドウイングの作業については、以下の可能性が確認できたと考える。

(1) 脳内回路の選択的生成・強化や分化・独立。分化・独立性が高まれば、同時並行的に双方の言語を往き来することが容易になるので、訳文側言語のみで原文を離れた訳文を作成してしまう、いわゆる「勝手訳」の可能性が減る。

(2) 普段の翻訳作業において、自分が具体的にどのような作業をしているのかを意識できるようになる。

(3) 広義の文法事項や文章の構成の確認。

(4) (2) (3) をふまえての、指導への利用。

(結論)

第一言語でのシャドウイングという方法論は、上記以外にも各種のバリエーションを展開できる可能性があり、いずれも、翻訳スキルの向上、伝達・共有、整理に際して有用である。

参考文献： 鈴木康之(2005)「作家のイメージする世界——芥川龍之介「トロッコ」、鈴木康之監修『新版日本語学の常識』数学教育研究会、107-129.